

日本国民文学全集 18

江戸名作集
Ⅱ

舟橋聖一
巖谷一
訳

河出書房新社

日本国民文学全集 第一八卷 江戸名作集(二)

定価三四〇円

昭和三十三年十一月二十日初版印刷 昭和三十三年十一月二十五日初版発行

著者代表 舟橋聖一

発行者

河出孝雄

印刷者

東京都千代田区神田小川町三ノ八
角能充朗
静岡県駿東郡原町大塚一五



発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ八

電話(二九)三七二一

振替東京一〇八〇二番

図書印刷株式会社印刷・小高製本

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目次

江戸名作集（二）

春色梅暦

舟橋聖一訳 三

春色辰巳園

巖谷楨一訳 充

春色恵の花

巖谷楨一訳 一元

英対暖語

巖谷楨一訳 一六

春色梅見舟

巖谷楨一訳 三三

訳者の言葉

三〇三

作者略年譜

三〇五

解
說

暉
峻
康
隆
三
元

装
幀
原
弘

梅

曆

(全)

巖 舟

谷 橋

榎 聖

一 一

訳

春色梅曆 しゅんしよくうめごよみ

初編 卷之一

第一齣

本所は中之郷といへば、結構、広い面積で、その昔は、小梅・須崎・押上と共に、牛島と称したところ。のちに中之郷竹町、中之郷瓦町、中之郷横川町等に分れた。小梅の業平町あたりも、昔は中之郷に属していたそう。なすなわち、中之郷村のうち、竹商の多い一區が竹町となり、元は耕地だったところへ、万治頃から瓦屋が来たり住したので、瓦町となり、また元町には、寛文十年幕府の郡代伊奈半十郎檢地の際、檢長屋、太子堂前などの名がつき、また、元町と竹町の間から斜めに東南に通ずる小徑を乞食藪と称するのは、昔非人頭金助が住んでいたところからである。原庭町は、もと砂土草莽の地であったところから、原場と呼んだのが町名となったもの。その原場に、藪の内、蛇山などの俗称で呼ばれる区域があるのは、竹叢繁茂して、蝮蛇の棲み家であったからだ。八軒町は、もと源森川の北にあって、戸数わずかに八軒であったから、この名があるそうだが、元禄六年に地を移した。

そして中之郷全体には、浅草川、道山堀（なみのり）名藍染川、源森川、横川、北割下水、業平川等大小の河川や掘割の水が流れていて、わずかの雨水にも水びたしとなり、あるいは葦荻の叢生するにまかせて、沮沢低湿の地であつたようだ。

「春色梅曆」の主人公唐琴屋丹次郎は、この本所中之郷に侘び住居して、病を養う身であつた。家といつても、たとえていうなら、水仙花にかぶせた霜よけ程度のお粗末さ。垣根は薄氷のはつている田圃につづき、家数もわずかに五、六軒とあるからは、八軒町よりもっと少いわけである。そんなわびしい裏借家も、住めば都というのか、万事不如意の新世帯に主人丹次郎は、十八、九の若者。人品いやしからねども、不仕合おせな人と見え、貧苦にせまるその上に、近頃は又病の床に伏したので、その不自由は気の毒な位。冬の朝風の身にしみる独り寝の門の戸に、

「少し、ごめんなさいまし、ごめんなさいまし」

「あい。どなたと
という女の声。

「あい。どなたえい。」

「そういう声は、若旦那さん……」

といいつつあける障子さえ、タテツケが悪
いので、ガタビシャン。急いでかけこむ女の
姿は、上田太織の鼠の棒縞、黒い小柄に紫の
山まゆ縞の箱縷を鯨帯にし、下着はお納戸の

中形縮縮、おこそ頭巾ずんを手にもって、髪かみの島田しまでが、少しみだれている。素顔すがん自慢こが、それとも寝起きのままか、化粧けしょうはなんにもしていないが、花の笑顔えんごのすいたらしさ。その目もとには、うつすらと愁うれいの翳かげが――。

丹次郎は驚いて、彼女の顔をうち眺め、

「米八じゃアねえか。どうしてきた。おいらがここに隠れているのが、よくわかったのも、ふしぎなこと。マアマアいいや。こつちへはいんねえ。夢じゃアねえか」

と、起きかえって、すわる。

「わちきはもう、知れぬえかと思って、胸がドキドキして、そしてもう、急いで歩いたものだから、アア苦しい」

と胸をたたき、ノドがひつつくようだと言
いながら、側へすわり、

「おまはんは、病^{わづ}らうていさっしやるのかえ」と、顔をつくづく見る。

「まことに、瘦せたねえ。マア色のわりいこととは、まっ青だよ。いつ時分から悪いのだから」「ナニ、十五、六日あとからよ。たいしたこともないが、どうも気がふさいでならねえ。それはいいが、手めえ、どうして知ってきた。聞きてえことも、たん」とある」

と少し涙ぐんでいる態で。
みよりけん

「ナニ、今朝は妙見さま（柳島の法性寺は妙見堂）に
末寺に属し妙見山安和院と号す。有名な妙見堂あり。長き
一尺ばかりの妙見像を安置す。靈驗多く伝へて賽者多し。
例月の縁日には、最も人出多し。妙見堂前に影向の松、又
大木下りの松ともいひ、妙見松とも言う。囲一丈三尺余の松の
に知れたる人口。」へお参りに来たつても、宅は

出ましたヨ。まことに不思議なことサねえ。

おまはんが、こんなところにおいでということは……ほんに夢にも知らなうだがね。実はこのごろ目見えにきた下地ッ子(原注 これまき 下地の子という 糞なり)の宅が本所のほうだと言いますので、それから皆と、いろいろなことを聞いて遊んでいるとき、その子が自分の宅の近所の咄をするなかで、どうも咄の様子が、おまはんの噂のようだから、その晩一しよに寝まして、よくよく聞いたら、その人の宅には、いきな

美しいお内室がいたと言いましたのさ。それで、違つたかと思つて、なおくわしく聞いてみると、おまはんの年よりお内室のほうで、年上のようなと言いますし、またお内室は、通して宅にいないと言ふし、わちきも迷つてしまつたのさ」

丹次郎は米八の話を、面白そうにきいてゐる。

「けれど、聞けば聞くほど、おまはんのような気がしてくるし、モウモウどうも気がすまねえから、その子には、わちきの聞いたことは口どめておいて、今日の朝参りには、なんでも、おまはんを尋ね出してみせると、この十五日を楽しみに、出てきたンでありましてアな。そうしたら、案に違わず、やつぱり、おまはん……日ごろの念力とはいふものの、ふとしたところからおまはんの、在家が知れるというも、妙見さまのおかけかと、嬉しいにつけて心配なは、お内室があるとの噂……」

米八は、室内を見廻して、

「今日はどこぞへ、お出かけかえ」

「ナニつまらねえ。どうして女房どころなものは。この様子でもわかるじゃねえか。して、その下地ッ子とやらは、どこの娘だらう」

「なんだか宅は八百屋だと言いましたよ」

「何？ 八百屋の娘か」

「そんなことはどうでもいいじゃありませんか。おまはんは、マアそれよりか、今じゃわちきのことなんぞ、思い出してもおくん

さるまいね」

「何をいうンだよ」

「お内室のことを、何もかくさなくつたつていいじゃアありませんか」

「かくすどころじゃアねえ、この姿で、どうするつてンだ。それより、唐琴屋の様子を話してくれないかよ」

唐琴屋というのは、そもそも鎌倉の北の遊廓にある大店で、丹次郎はその家の養子であり、米八は内芸者である。ところが、親夫婦の死後支配人の鬼兵衛というのが悪いやつで、丹次郎は家にいられず、本所中之郷へ仮住居する身となつてゐる。米八は一膝寄つて、

「宅の様子は大変さ——鬼兵衛どんの氣じや、みんなに旦那さんといわれて、いい心持になりてえのサ。死んだお女将さんの達者な時でさえ、あの通りだったンだもの、どうして、そうはいきまずものか。それをなんのか

の言つて、三日にあげず、内証はモメが絶えやアしませんわ。わちきもおまはんが、養子に行きなざつたときから、住み替えに出たいと思つて、氣をもんでいましたけれど、どうもああいふ意地悪だから、えこじになつて出すめえとするし、クサクサしながら、今日までは我慢していたけれど、おまはんの宅は知れるし、そしてまア……」

と、あたり見廻し、涙を膝にこぼしながら、

「こんなはかない形身になつておいでなされるのを見て、どうして唐琴屋なんぞにいられますものか。わちきは今日帰つたら、すぐ住み替えをたのんで、婦多川(深川のことで、これを婦多川といふ)へでも行つて、辛抱して、おまはんの身を、少しでも楽にさせ申してえネエ」

と、真実見えし米八の意地に、男は始終、ふさいでいる。

というのが、支配人鬼兵衛は、先の番頭松兵衛とのなれ合ひで、倒産す前を承知の上で、丹次郎を唐琴屋の急養子にしたのであつた。それとは知らず、養子入りの丹次郎は、山なす養家の借金に驚いたものの、これも縁付いたからは、義理を欠けぬと、実家から百両調達、鬼兵衛にも判を押させて、仏事その他に使い果たした。そのため実家へも出入りかなわす、音信不通の身となつたばかりか、養子先は身代限り。それでも、後日にはこれがあつたといつて、松兵衛が畠山様へ差し出して

る五百両の証文を、丹次郎にくれる代り、破産清算の百両のうち、七十両は鬼兵衛が取

り、あと三十両は、手代どもにわけるといつたが、鬼兵衛はその金を持ったまま、上方へ旅立ってしまったのである。

ところが、二番頭の久八が、親切に丹次郎の名代で、皇山様へ預け金を取りに行ったところ、五百両を下げつかわすのはいいが、先ごろ松兵衛に預けた残月の御茶入れ、どこぞへいい値で払い下げを命じておいたが、このほど聞けば、梶原家へ、千五百両で納まったとのこと。そこで差引き勘定、千両をさっそく上納あるべしとの沙汰に、久八は驚いて立ち帰り、一同相談の最中、お屋敷からは役人衆が、出向いて来られて、

「唐琴屋分散とあれば、ゆるがせならぬ茶入れの金子——松兵衛ならびに当主人、夏井丹次郎同道いたせ」

と、嚴重な仰せ。それで、久八のはからいで、ともかく丹次郎は、難を避け、本所中之郷の草屋へ身を隠したのである。しかも、松兵衛は風をくらって高飛びしたので、今のところ、久八が当面の難題処理に当たっているのであるが、丹次郎とていつな時、最悪の事態に襲われるかもしれないのである。

そうした事情をきくにつけ、米八は、

「まことに聞くも、口惜しいねえ。そしてそれが、おまはんの病気の世話をしますえ」

「ナニ世話といって、いついて世話のしてもないが、長屋の衆や、また主に世話になるのはなア……」

「誰じゃぞえ」

「今話した番頭久八の、かみさんの妹が、女髪結をして、この近所にいるから、その人が時々来て何かの事をしてくれるのサ」

「そうかえ。その女中とは、なんでもないのかエ」

「ナニそんな浮気な沙汰じゃアねえわな」

「どうも気になるねえ」

「こうしていても、おいらア、実に心細いヨ」

と、丹次郎は泪ハラハラ。

「若旦那——なぜそんな悲しいことをお言いなさるのだエ。もうこうして、在家が知れたからは、どんなことをしても、わちきでできることだけは、おまはんに不自由はさせやアしませんから、氣をしつかりと持って、早く快くなっておくんないヨ。こんな淋しい所に、夜も独りで、マア、さぞ」

と顔をそむけて袖を目にあてずにはいられない。昔といえは遠からぬ昨日にかわる丹次郎が病氣姿。たとえ内証はともあれ、唐琴屋の若旦那といえ、場所柄として、諸事華美にばかり暮らしてきたその人が、三疊敷を玉の床、たまさか訪れる人前も、さすがに恥じろう憂き住居を、思いやらる男の心のいじらしさ、淋しさが、米八には、千万無量のもの案じである。

丹次郎は泪をふきながら、

「何サ、おいらはこうして、世間に遠慮している身分だから、不自由も何も仕方がねえよ」

「だからもうココを、わちきは帰りませんよ」

「そんなことを言わねえで、今日は帰ってな、また顔を見せてくんない。あんまりおそくなるといけないだろう。いいのかえ」

「ナニ、今日はおそくなくてもいい用心をしてきましたのサ。奥ざしきのに徳さんの手紙をたのまれたから……」

奥ざしきというのは、米八のいる唐琴屋の花魁のうち、今全盛のお職のことを指したものだ。

「そして観音さんと淡島さん（淡島堂は浅草観音に池をめぐらす淡島明神を祀る。住吉は、へ、お百度をこに東照宮ありしをのち城中に移したり）へ、お百度をして帰るつもりだから、うんと手間が取れるように言っておりますよ。オヤ、火が一つもないねえ」

と言いつつながら、火打箱をさがし、ようよう火をおこして、

「薬を煎じておいて上げよう。どの土瓶だエ」

「その火鉢の脇にあるよ」

丹次郎は枕もとの薬を出しながら、

「生姜もその盆の上にあるだろう」

「ああ、ありますよ。オヤこの土瓶は口が欠けているよ」

と思わず笑ったが、また哀しくもなるのは、男の不如意を察して、氣がふさぐからである。

「お医者さんは、どこにかかっているのさ」

「ナニそれもお浜さんが、世話してよこしたのだ」

「おはまさんとはエ」

「今話した久八の女房の妹よ。目見えの下地ツ子の言ったお内儀さんというのも、そのことだろう。そりゃアいいが、おいらとお前の仲を知られては、うまくなろうなア」

「ナニ、ひとはナンだか気がつきゃアしませんが……そして、おまんまはありますかえ」

「ムム、飯はゆうべ、向いのおばさんが来て、焚いてくれたからいいが、お前がへってるんじゃないのか。ここいらはちょっと食わせる気のきいたもの一つねえ。ずっと遠方だから、こういうときに困るのさ」

「ナニ、わちきは昼までは、塩断ちだから、どうでナンにも食べられませんが、おまはんにはなんぞおいしいものでも食べさせたいよ。わちきがなにか、こしらえて上げたいが……こうしているうちに、なんぞ思い出してごらんねえ」

米八は、紙入れから何か包んだものを取り出して、

「マアこれで、なんぞ不自由なものを買って置いて、少し身になるものを、食べておみなさいよ。今朝はほんの朝参りじやアあるし、おまはんはに会われるかどうかともわからないので、ほんとにちつとばかりしかありませんよ。またそのうち都合して出てきますヨ」

と、手に渡せば、丹次郎は遠慮なく貰ったものの、少し気の毒になり、

「米八……これじゃアどうも気の毒な話だが、……そうしてもう帰るのか」

「ナニ、まだ帰リゃアしませんよ。おそくなっても、今のわけだから、心配はないよ。マア、おまはんの頭が、ひどくうっとうしそうだねえ。そつと束ねて上げようかね。そうしたら心持が、ちつたアさっぱりなさるだろうヨ」

「そうよ。まだいてもいいンなら、そろそろと、とかして貰おうかの」

「どれ……」

と米八は男のうしろへ廻って、嬉しそうに、

「わちきの差櫛でもよからうね」

「当り前じやアないか」

「ほんとにまア、むさくるしくなっているヨ」

と、心弱きはさすがに女。昔を思い、今を眺め、鬢水ならぬ涙のしずくを、ひいやりと丹次郎がえり元へ。

男はふりむいて、

「米八、なぜ泣くんだ」

「それだつても」

「それだつてもどうした」

「おまはん、マアなぜこんなに、はかねえ身の上にならしゃつたのだらうねエ」

と、男の肩に取りすがって泣く。丹次郎は

米八が手を取って引きよせ、

「かにんしてくんなよ」

「なぜあやまるのだエ」

「お前にまで、悲しい思いをさせるからさ」

「エエ、もうおまはんは、わちきをそんなに思つておくんなさるのかエ」

「可愛いくつてたまらねエのだ」

と抱き寄せれば、米八はあどけなく、病人の膝へ寄りそつて、しみじみ顔を眺めながら、

「ほんとに嬉しくつて……お願いだヨ」

「お願いとは？」

「こうして、いつまでもいたいからさ」

といえ、男もつくづく、米八のあだッばい姿に見とれて、

「ああ、じれつてえの」

とびつたり寄り添う。

「あれ、くすぐったいよ」

「はい、堪忍しい」

丹次郎がそういつて、横になるとき、はるかに観世音の、巳(四ツ)の鐘――

ポウン

ポウン

第二勸

遠くで近きは男女の仲とは、清女が筆の妙であるが、そも丹次郎と米八は色の楽屋ともいふべき唐琴屋の一つ屋根の下に住みながら、いつか契りし約束を、違えず守る操の頼もしさ。ところがようやくの思いでたずねてきた本所中之郷は九尺二間の破れ畳で、病の床に敷くものも、薄きをかこつ恨み泣き。今売り出しの米八は、沢山ある客衆からふりかかる玉の輿のようないい話をば打ちすてて、貧苦いとわず、丹次郎と誓うは誠の恋の欲か、でなければ、狹斜の巷に生きる女が立て通す

意地でもあろうか。

丹次郎は顔をしかめ、

「米八——その薬を茶碗へついでくん。胸がドキドキするから」

米八は自分の差櫛で、男の髪をといていたが、

「おや、そうかえ……どうしよう」

と、驚いて薬をもってくる。丹次郎はニツ

コリ、何、なんでもねエ」



「病人なのに……悪いことをしたねエ」

と、女もニツコリ笑う。

「そりゃアそうと、あのお長は、どうしたろう」

「お長さんかエ。あの子もまことに苦労しま

すよ。それに鬼兵衛どんが、何か言うらしい

ので、よけい心づかいしているようす。ずい

ぶん、わちきも側で気をつけていますけれど、

何をいうにも、おまはんとわちきのことを、

ちつと勘ぐっているものだから（原注 このかん

う俗語なり）実にしにくいところもあるのサ」

「そうさ。あれも小さい時から、ああいうと

ころに育ったので、可哀そうだよ」

と、少しふさいでいうので、米八はグツと

きて、

「さようさね……幼馴染は格別可愛いそうだ

から、ごもっともでございますヨ」

どうでも勝手にしろ」

丹次郎は病人でも、気は強い。

「おや、おまはんは、腹を立てているのかエ」

「腹を立てようが立てまいが、うっちゃって

おくがよい」

「だって、おまはんが、あんまりお長さんの

ことを可愛い可愛いとお言いだから、それで

ツイ……」

「ナニ、おいらがそんなことをいうものか。

可愛いじゃアない。可哀そうだと言ったン

だ」

「おや、可愛いも、可愛らしいも、可哀そうだ

も、おんなじことじゃアありませんかエ……

ええ、わちきがわるけりゃア、カンニンして

おくんなさいな」

「どうでもいいわな」

と、丹次郎は、ますます冷たく突き放す。

米八は、惚れた弱身に、もし愛想尽かしでも

されるのではないかと、心配になり、

「アレサ、ほんとにわちきが悪いから、どうぞ

カンニンして機嫌を直しておくんないよ」

と、おろおろする。丹次郎は、この辺でよ

からうと、笑顔に返り、

「そんなら、カンニンするが、もうおそくな

るだらうから、おれがことを案じずに、宅へ

帰ったら、座敷を大事に勤めなヨ」

とやさしい言葉に、胸は一ぱい。わずかな

ことが、しみじみ悲しくなったり、また嬉し

くなったりするのは、惚れた同士の恋仲であ

る

る。

「若旦那——おまはんがそんなに優しく言ってくれさっしやると、またなおのこと帰るのが、いやになりますよ。きつともう、どんなことがあっても、心変りなぞしておくんないですよ」

「ナニ、べらぼうめ」

「わちきは、そればかりが案じられてならないヨ。こうしていさしても、どうぞ時々、わちきのことを思い出しておくんないヨ」

と、あどけない心の文である。

忘れねばこそ、思ひ出さず候とは、名妓高尾の金言だが、おたがい相惚れの深い仲ほど、愚痴になり、少し離れていようものなら、もしや自分を忘れはせぬかと、思ひ出すのが恋の癖である。恋路のせつなさほろ苦さは、その身になってみないことには、なかなかわからぬものであって、よそ目に見れば、ただアホらしくバカらしいだけ。しかし、そのアホらしさを笑うものは、恋知らずとも、また、ものの哀れを知らぬ人とも言われよう。

丹次郎は、高尾の金言を思ひ出し、

「思ひ出すどころか、忘れる間があるものか」

米八はまだお長にこだわって、

「それでもアノ、お長さんのことを思ひ出しちゃアいやだよ」

と、男の顔を見る。

「バカばかり言っていざとも、帰る支度をしな」

「なんの支度がありますものか、この着物を端折るばかりだわね……それじゃアもうなんにも用はありませんかエ。あのね、わちきがまた来るまで、不自由なものがあるなら、どうかして、使いをよこしておくんないヨ。是非わちきは住み替える心だから、そうならとまたどうでも自由になるから、案じずにおいでなさいヨ。少しは胸に法もありますヨ」と言いながら、まだ未練たつぷり、そこいらを片づける。そして、帰りがけるが、また坐って、

「おまはん、ナゼそんな顔をしておくんないんだえ」（原注　さんというをはんと言い、さるといふをばると言う。すべてカタコトは察し給え）

「いつもと同じ顔じゃアないか」

「いいえ。そんな顔をしてなすっちゃ、わちきは心が残って帰られないわエ」

と、涙にくれる。すると丹次郎も、口ほどに、

「実はおいらもなすだか急に心細くて、どうも帰しともねえようだが、——やっぱり帰らざアなるめえな……」

といわれてみれば米八も、しんそこホの字の男の心が思ひやられて、いたいたしく、

「ええ、いっそのこと、これから二人で……」

「ナニナニそりヤア悪い。そうすると鬼兵衛が器用に鞍替えをさせるこっちゃアない。サアサア機嫌よくして帰んなヨ……米八」

「そうさねえ。どんなことでまたおまはん

に、難儀をかけるような事になっちゃア悪いから、心を鬼にして帰りましょ」

「そうよ、なんでも器用に出るならよし、無理なこととして、お前の身に、いやなことでもあった時は、まだおいらに力がないから、どうぞ、おれを思ってくれるなら、ひどいドキウはしないがいいよ」（原注　近頃は肚をすてて、善しうという。この本を読む人々は）

「あい。わちきだつて、おまはんのためにすることだから、どうなつてもとは思ふものの、二人が身にとって末々がつまらないことになるような無理はしないから、そんなことは案じないで、早くよくなつておくんないヨ。そんならわちきは、もう行きますよ」

と、米八はしおしおと立ち上がるが、またも男にしがみつきの顔を上げしげ眺めて、

「きつとでございますヨ」

「何をきつとだ」

「ほかの女に、気を出すと、いやだと申すことさネ」

「うん、承知だから、道草をしねえで、帰んなヨ」

「ナニ、途中で寄るようなところがありますものか」

「そして、さっきの手紙を、お前裏前へ頼んでやるのじゃアねエか。誰かに頼んでやろう」

「あい。そうだッけネ。それじゃそうしておくんないな。よく気がついてくれさッしや

ツたね」

米八は、土間のほうへ下りかけたのを、また上がつてきて、手紙をわたす。（原注 下されれさッしやる。くれさッしたのた）
「いづままでいても、限りはねえから、もう思

いきて、行きましよう」

と、やっと上がり口へ下りて、履物をはく。丹次郎は送って出て、

「アア、コウ、米八」

「あい」

「何かまだ用があるようだッけ……イヤいいい。急いで行きなヨ」

「あい、そんなら……おまはん」

と、いかにも名残り惜しそうに、出て行くのを、そのうしろ姿を見送る丹次郎は、ひとりごと……。

「可哀そうに、あんなに苦勞させるのも、なソの因果だろう」

と、泪をホロリ。

「ああ、もうふさぐめえふさぐめえ」

彼は再び、蒲団の上に坐ったが、ふと目につくは、床のそばに、米八が置き忘れていったおこそ頭巾が……。

「ホイ、これはしたり、頭巾を忘れて行きやがった。アア困っているだろう。まだ遠くは行くめえが、病人のおれじゃ、駆けてもいかねえ。じれつてえ話だなア……」

ト、頭巾を手にもって、どうしたものかと、心はとつおいつ。と、このときまた、上がり

口の戸があいて、

「若旦那エ」

「おい、米八か」

「わちきは頭巾を忘れて……」

「いま、おいらも気がついて、駆けるに駆けられず、まごついていたところだ」

と、頭巾を女に渡しながら、

「どこまで行った……」

「どこだか知らないが、武士屋敷のようところまで行ったとき、そこで気がついたのさ。何も頭巾はなくてもいいけれど……」

「いいけれど、どうした」

「また、ちょっと、帰ってみたくなったのさネ」

丹次郎も思わずその可憐さに、ニッコリ笑いたくなくて、

「そんならいいから、早く帰ンなヨ」

「こんどこそ、ほんとうに帰るよ」

と、思いきって、出てゆくうしろに、丹次郎は思わず胸のうちに、

「ああ、可愛いやつだ」

——障子びっしり、フツと溜息をつく折柄、屋商人の声で、
「豆腐ウーイ……豆腐」

このような、惚れた同士の恋々たる姿こそ、まことに愚痴の至りであるが、また、その人の身にとっては、よそに知られぬ恋の悩みである。たとえ、このような趣向ではなくとも、一皮むけば、みな同じ男女の情に苦勞するの

が、浮世の姿である。色は思案のはかというが、この道ばかりは道理もかなわず、物のあわれもこれより生れるのである。とすれば、かかる情痴の色景色とて、また匹夫の心をやわらげる一助ともなるものか。

老婆心人 狂訓筆記

卷之二

第三節

九年十年、なソの苦界か花衣。悟つてみれば面白い色の浮世のその中に、色を集めた新吉原仲の町の青楼、唐琴屋というのは、ずいぶん繁昌の大見世。主夫婦が亡くなつて、血筋のあるのはお長一人。今年十五のきりょうよし。しかし両親がないので、番頭の鬼兵衛が後見をしている。そのため今では、鬼兵衛が主人も同然で、万事に我意をふるうのだが、頭をおさえる者もない。むろん唐琴屋抱えの女郎、芸者のうちには、利口な女もいるのだが、もともとと給金で飼われている身ゆえ、後見役といつても、主人に同じ鬼兵衛には、面と向かつて楯つく者もない。ただ、先の主人の存命の日を思い出しては、薩で鬼兵衛の悪口をつぶやくのが関の山、他にせんすべもないありさまであった。

さて、唐琴屋の花魁に、此糸というお職があった。年は若いのが万事に抜け目なく、この

見世の内部の評判はもとより、出入りの者や茶屋、船宿の噂にも、はめのない者はない位で、情けに厚い派手好きだが、それだといって蓮ッ葉なところのない、しとやかな気性ではあり、艶色は吉原でも屈指といわれる真情知りだった。

頃は春の梅ごよみ。

櫺子窓の鉢植に、梅が香かおる春風はまだ肌寒い。身にしみわたる紋日紋日のやるせなさ。今日はあと着の着はじめで、巳の刻(午前十時)すぎで起きそう、朝日の紅に色はえる仲の町の賑わいをよそに、花魁けいの此糸が、内芸者米八と、何やらヒソヒソささやき合っている。「もしエ、花魁。わちきはもうおまはんのことは死んでも忘れやアしませんヨ」と、米八は泣きながら言う。

「あれさ、この子はそんなに泣いて……誰か来るといけないヨ。今みんなお湯へ行ったから、早く顔を直して、下へお行きよ。なんにも案じることはない。ひとに悟られないようにするのが大事だよ」

「ほんとにありがとうございます。でも考えてみると、わちきのような者のために、少しの間でも、藤さんが世間から何かと言われなさるかと思うと、面目のうございますねエ」

「何さ、気にすることはない。藤さんはああいう気性だから、それを見かけて頼んだのだもの……マアア、おいらにまかせておきなヨ。それにしても、今夜また文をやって、藤

さんと呼びたいもンだが……」

と言うところへ、誰やら廊下を静かに歩いてくる足音。米八はすくと察して、

「ああ、お長さんらしゅうございますねエ」

「そうらしいよ。さア米八さん。早く下へ行くがいい」

というところへ、障子をそつとあけたお長が、

「花魁。お座敷かエ」

「ああ、座敷ですヨ。お長さんかエ」

「はい」

と、次の間にはいった様子。此糸はお長のほうへ。

「さアこちへおはいンさい」

と言いながら、少し顔の色を変え、

「これさ米八さん——今の通りだから、気の毒だが、そう思っておくンさい」

と、つつけんどんに言うので、米八も芝居気を出し、

「そりゃ、わちきのしたことだもの、何も花魁に言われなくたって、わかってますよ」

と、喧嘩腰に言って、廊下へ出る。その間にお長は、入れかわって、本間へはいる。此糸は米八の出でいったあとへ、憎々しく、

「口のへらねえ芸者だヨウ」

お長はそれを聞きとがめて、

「花魁、なんでございますヨ」

「なに、ちょっとしたことさ」

「花魁が腹をお立てになるなんて、よくせき

のことでございましょう」

「なに、外のことなら、わちきももう、なるッたけひとと顔をあかめ合うまいと思って、芸者だらうが、新造衆だらうが、気をつけて口をきいておりますのさ。でも、米八のやりかたはいかになンでも、あきれかえるじゃアありませんか」

「一体、どうしたっていうンですか」

「わちきをまるで、コケにしているんですものね」

それを聞き、お長は年齢もゆかないが、幼いときから廊に住み、苦界のいざこざは毎度のことである。

「米八さんは、日頃から、男ぎらいの、堅いのと、人が噂をする位なのに、何か、おかしなことでもしましたかエ」

「男ぎらいだか、男好きだか知れやアしませんヨ。わちきも、米八さんの出よう次第で、こんどばかりは、打っちゃってはおきませんよ。米八を出すか、わちきが出るか、二つに一つ

の黒白をつけて貰わざア、くやしうって……もし鬼兵衛どんが言うことを聞いてくれないようなら、いっそ内証へ坐ってやります」

と、いかにも腹立たしそうに言う。これすなわち米八と相談して、此糸の客人藤さんと米八が、色をした趣をこしらえ、それを此糸がやかましく言い出し、米八をうまく住み替えさせて、中之郷の丹次郎と、少しは気ままに会わせてやろうという企らみである。そも

そも丹次郎は、もと唐琴屋の跡取りであつたのを、両親が死んだのちは、借金多く、鬼兵衛が後見して、威張りちらし、丹次郎は中之郷に追つぱらわれて日蔭者の暮らしをしている。此糸はこの話を米八に聞いて大いに俠氣をおこし、古主を米八に貢がせるべく、義理と人情の手くだをもつて、わざと仕組んだ芝居である。しかし、若いお長はそれまでは情らず、自分の許嫁である丹次郎と、米八の情事を前から少し焼いているので、米八が此糸に憎まれるのをいい氣持に思うのであつた。

「オヤ、そうでございますか。男ざらにと言われる米八さんでも、やっぱり、そんないたずらをするとは、人はわからないものでございませぬエ。そりゃアそうと、話にうかれて、薬を上げるのを忘れました。花魁、湯呑みへつぎましょか」と

と薬をついで、下へおき、

「花魁エ。今のようにお言いだがね、わたしは花魁が内証へ坐つたり何かすると、まことに困りますから、どうぞそうしないで、我慢してやつておくんなさいヨ。花魁が、そうしなると、鬼兵衛どんがまた何をするか、わたしや心細いよオ」

と、ホロリとこぼす涙の一滴。

此糸は、それを見て、両親が生きていれば、一人娘のお長がこの家の奉公人に、どうして手をさげて頼んだりすることがあろう。幼い時から親にはなれて育つほど、悲しいものは

あろうかと、此糸は心にひとしお、不憫をま

し、

「ほんとにおまはんは、可哀そうだね。こうしていても、おかみさんの達者なころの姿はなし、禿衆同前の姿をして、このように二階へ薬を持って来さっしゃるのを見るにつけ、涙の種でありんすヨ」と、お長を膝に引き寄せて、思わず涙にむせかえる。まことの嘆きは傾城のやさしき鑑ともいうべきである。

作者この草稿をするす時しも、九月九日丑満時。はじめ雁の声を聞いて、

かくばかりやさしき君が手枕にことづてやらんはつ雁のふみ

○

お長は此糸がやさしい言葉に、思わず、

「ワッ」

と声を立て、身をふるわせて泣いたが、やがてソツと顔を上げ、

「花魁エ。お前がそんなに言っておくんなざると、わたしはもう、母さんでもあるように思われて、悲しいよ」と、また取りすがる。お長はまだ肩あげのとれぬ若い娘の一筋な心。此糸はいとしさもいやまさり、

「わちきも何の因果やら、一人ならず二人まで、頼られてみりゃア、世話をしずにはいられないヨ」

お長は、それを聞きとがめ、

「一人ならず二人とはエ」

「何サ、おまはんと、若旦那とさ」

と言いまざらして、涙を拭き、

「そしてこのごろ下の人は、機嫌がようござんすかエ」

下の人とは、後見の鬼兵衛のことである。鬼兵衛はお長をわが心に靡かせようと、その機会をねらっている。

「ナニ、わたしはほんとに困りますのさ。というて、言うことを聞くのはいやだし、聞かなければあの通り。朝からいじめられて、どうしていいかわかりませんのさ。それにつけてもお兄いさんは、どこにどうしておいでなさるか。こんなにわたしがつらい目にあっているのを、ちつとも御存じないのでしょうか」

お長は心に、丹次郎を夫とは思っているが、小さい時から一緒に育つたので、まだお兄さんと呼んでいるのは、此糸の手前、小差すかしいからでもある。此糸はお長の耳に、

「ナニさ、お案じなさいませぬ、ナンとかして、おまはんを、そのうちこの家から身抜けさせる手段もありましょから、必ずキナキナ思わずに、今のうちには機嫌よう、用を足しておいでなさい。サア、ソロソロ座敷の者が湯から上がってくると悪いから、早う下へ、

おいきなさい。必ず案じなさんすエ」

「はい、ありがとう。それじゃア下へいきますよ」

と、立つて次の間へ。

折から廊下をバタバタとかける禿、障子をあけて、

「おや、お長さん。今、下で大層呼んでますよ。早く裏梯子から下りておいでなまし。あの意地悪な鬼兵衛が、おそろしい顔しておまはんを呼んでますよ。ほんとになんて憎い顔だらうヨ」

此糸は、禿を叱って、

「何だね、しげりや。その口のききようは……お長さん。早く下へお行きなさるがいい。何もこわいことは、ござんせんヨ」

といえども、お長はオドオドと、家来にひとしい鬼兵衛を怖れこわがる風情のいじらしさ。此糸は、そばで見るのも気の毒そうに、「しげりや。お長さんと一緒にいて行ってお見。小言が出るといけないから……」

お長ははや泣き声で、

「花魁——叱られたら来て下さいよ」

と、おろおろ、階下へ下りて行く。あと見送って此糸は、

「可哀そうに、いじらしい子だのう。ほんに米八さんもおの子もどっちをどうとも言われねえから、両方にまア、苦勞をしてやることになるんだが、一体全体、なんの因縁だらうねえ」

と、ひとり言を言いながら、ホツと溜息をつく。折から番頭新造が湯を出て来て、障子をあけ、

「ながいお湯でしたらうネ」

此糸は、ニツコリと愛想よく、

「アイサ、相当に長湯でしたね。おまはんが今あがってくるるとき、下でなんぞまた小言が出アしませんでしたか」

「いえ、気がつきませんでしたよ」

と言うところへ、禿がかけてきて、

「あ、う、花魁エ。又、鬼兵衛どんが、意地悪を言い出しましたから、早く行っておあけなさいまし」

「まア、そうかエ。どうも困るよ」

と、上履をはいて、廊下へ出る。番頭新造はうしろから、

「またお長さんのことですか。可哀そうにネエ」

「わちきが力になって上げずば、あんまり気の毒だからネ」

と下りて行く。番頭新造は湯上りの頭を、かんざしで掻きながら、禿を呼び、

「しげりや……書付を取っておいで。それから、ゆうべ書いて置かッしゃった藤さんの文を、巴屋へちよつと持って行つたといとくれ。そして、柏屋が来たら、翁草の後篇と拾遺の玉川を持ってきたと、そう言うのだよ。ドレ、花魁の来さッしゃらねえうちに、お茶でもいれよう」

と、茶ほうじを出して、茶をいれる。

作者曰く

この草紙は、もっぱら米八お長らが人情を

述べるのが主であるから、青楼のうがちを記すが目的ではない。もとより作者は、妓院の事情に精通してはいない。よってただその趣を略述するのみである。必ずしも洒落本と同じに論じてもらいたくはない。かつ、筆のついでに申せば、この一節を読み、お長が苦心の様子を見る人は、父母のことを大事にし、必ず仰せにそむき給うな。あに世の中には、このお長に限るうや。父母に早く離れた人は、他人のために恥づかしめられ、いじめられること、お長以上の人もあろう。成人するまで、父母のこの世にましますこそ、千々の黄金にもまして、いとありがたしと尊ばねばならぬことである。

あるときはありのすさみにつらかりし

なくてぞいまは人の恋しき

訳者注——(一)「翁草」とあるのは、神沢貞幹の隨筆と、伊丹椿園が同名の読本(五巻と二巻あるが、ここでは後者の意であらう。詳しく言うところ、「今古奇談翁草」という。その序に、

「翁に來たる日、小園の菊、燦爛として幽香室に満つ。終に翁草と題す」とあり、安永六年の刊行。京都菊屋安兵衛の版。

(二)「玉川」は人情本七編二十一巻。作者は、四、五編の巻末に「為春水元稿、春水が會友、松亭金水補綴とあるから、最初のほうは春水作、後半は金水の代作であらう。そのあと第六編の見出しに「拾遺の玉川」とあり、序に「今年には自筆を染めたり」と断つてある。文政十年頃から、天保のはじめにわたって、連続発売されたものと推定される。題材は、万葉集中の菟名負(ウナヘ)処女説話、真間手古那説話、大和物語中の生田川説話等によつて作られたことが善頭に述べてある。

(三)この歌の出所が明らかでない。古今六帖の五に、類似の歌がある。——生きてゐる間は、ついおたがいに安